

歟。マホメットとは、ムハメット即ち英語にて所謂セイブイア(救主)の一轉化したるものにして、彼を尊敬するの餘り遂にムハメットと稱し、後マホメットと訛するに到りしものなる可し。吾人は唯だ夫れ世俗に倣ひ暫く之をマホメット(Mahomet)と呼ぶことに爲したり。

彼はコレーイシユ族の血統たるハシエム家の末葉に連れるが、彼の祖先は實にアブラハムなりき。アブラハムの次妻ハーガの兒イシユマエルは是れ亞刺比亞の祖なるに非らずや。之を以てマホメットがアブラハムを畏敬することは、殆むど他の預言者以上に超えたるもの有り。

マホメットは亦た亞刺比亞種族の目して以て神堂靈泉なりと爲すメツカのカアバ堂及び其傍に湧出するゼムズエム泉と離る可からざる深き因縁を有せり。カアバ堂は昔アダムが第七天を逐はれしの日、人界に降り來て神堂を築きし靈跡なりと傳へ、また預言者アブラハムの足

跡を印せる黒石を祭れる堂宇也とも傳へあり。ゼムズエム泉はハアガがイシユマエルを携えつゝ、荒野に於て發見せりと傳ふる所のものならむ。何れにしても此二個のものは亞刺比亞人に在て神堂靈泉たるもの也。而してマホメットが一族コレーイシユ族は實に此神堂靈泉の保護者たる可きメツカの知事たりしに非らずや。神體を直覺して『嗚呼大なる哉、アラト(天神)』を歌ふには、マホメット誠に都合よき血統を持したりしが如し。

マホメットの美貌は多くの書に由て今尚傳へらる所也。曰く、其顔色、藍色にして、稍や澹紅色を帯び、黒眼星の如くして、耀き怒れる時には、ハシエム家の特相たる高く膨脹せる血脈額上に露ると、其風丰賢正にして、其才能粗豪に、思想遠大の荒野の子たる相貌は彼の全身より發揮さるゝ所のものなりき。且つ彼はアラビヤ特有の辯舌を有したりし也。其默

考の境に入るや、殆むど死せるが如く、而して一度談論を交へむ歎、滔々紅色の唇を發して現はるゝ所のものは、捉捕するに由莫からむとす。而して情火に満ち、光明に充ち、至誠に充つ、怡然これ末製品の寶玉也。熱帯國民の情火に充てるは、吾人が見聞の證する所也。彼等の多くは年齢七八歳に到れば既に他と婚を結び、遅きも十三四歳を以て然りと爲せり。是れ實に其の愛情の早熟を證するもの也。而して又彼等の男性の多くは恒に三四人より六七人に到る婦人を専有するを風習とせり。即ち一夫多婦の習慣を有せり。文明國人は直に指して其野蠻を嗤笑すと云へども、是れ必らしも然らず。彼等は決して唯一の習慣を奉じてのみ此惡風を襲踏するに非らずして、實に其地理其熱帯の竟に然らしむるものあらざる可らず。マホメットが父母の國に於ても一夫多婦の習慣は深く國民を染め居たりき。印度に於て亦然り。絶代の偉人釋迦の如き

三人の妻を有したりきと傳ふるに非らずや。蓋し此等の情火は決して女に對する場合に於てのみ、彼等か専有するに非らず。彼等は總ての事物に對して、此温情を持するを忘れざりき。吾人此に證言せざる可からず。彼等は人を屠るの劍を持しながら、尙能く其敵を愛したり。彼等は教育なければ、彼等の心靈は恒に至誠なりき。人の來て彼等を欺かずむば、彼等は決して人を欺かざりき。是れ豈に彼等の一大美德に非らずや。而して此至誠と熱情とは、直に宇宙の大を覺知するに足る所の鍵に非らずや。釋迦印度に現はれ、マホメットの亞刺比亞に出づること、是れ誠に研究を要す可きの問題也。

世俗はマホメットを綽名して、荒野の子と云へり。洵に適切なる語と謂ふ可し。而して亞刺比亞人は彼を目してアラブゾール(亞刺比亞魂若くは亞刺比亞人の精華と云ふの義)と稱せり。是れまた甚だ適切なる讚辭

と謂ふ可し。アラビヤ人の特徴は其至誠なる點に在り、マホメット大なる至誠を有せりき。アラビヤ人の特徴は其熱情ある點に在り、マホメット大なる熱情を有せりき。アラビヤ人の特徴は其才の粗豪なるに在り、マホメット亦之を有せりき。アラビヤ人の特徴は其信念の堅固なるに在り、而してマホメット之を有せりき。其他アラビヤ人の特徴として數ふ可きは其默考に在り、剛健に在り、快辯に在り、マホメット悉く此等の特徴の大なるものを持して起てり、而して世人の特に彼等に向て拂ふ可き注意は、此等の特徴の多くが決して修養の結果得來られしもの、非らずして、何等の琢磨を経ず、自然天與の儘光澤を放ちつゝある事是れ也。マホメットが才能思想に到て、吾人著しく其然かるを視る、世俗が稱して荒野の子と云ひ、古のアラビヤ人が讚美して我等の精華なりと誇りしもの、洵にマホメットは亞刺比亞國人に在て理想の英雄そのも

のたりしや必せり。
山河の人心を感化する其力は、恐ろしきもの也。大なる山嶽、大なる海洋、大なる國土、其所には必らず大なる精靈あり、文明國人たるを問はず、野蠻國人たるを問はず、人心は恒に其育成を受くるもの也。マホメットは如何なる風土に育成されしや、カーラニルは説いて曰く、マホメットの母國たる亞刺比亞の人民は實に著明の人民也、其國既に著明にして此かる英傑の出現に適せり、巖石の嵯峨たる山嶽あり、渺漠たる沙漠あり、緑なる樹は露を含みて其溪間に生ひ、水ある所には必らず此綠蔭あり、バナム樹あり、椰子あり、漠々として平砂限り無き地平線上、全く人煙の跡を絶てる所、寂か、寞か、宛然大洋の形を呈して、遠く天の一方に連れり、身此境に在らむものは、獨り天地を友とす可き也、晝は太陽、白金を鎔かすが如く、人目を眩惑し、人身を焦盡し、人をして其熱光に堪えざらしめ

むとす、而して夜は、大空清澄として、大く廣く、靜かなる處に、無數の星斗は高く輝きて、其光茫を放つを見る可し、此くの如き廣漠の邦國は、正に沈毅剛邁にして、思想遠大の心を有する人種に、適せり——と洵に然かるを見る也。アラビヤの地たる東は波斯灣に對し、西は紅海に接し、而して國內には世界に有名なるサンデイ砂漠のある有り、晝は太陽の光國土を焦し、夜は清空高く澄みて露光砂上に充ち、而して奇香を送るベアム樹の蔭、幾多の天童の羽衣を收めて相囁くの聲あらずや。此熱情と此雄大とに由て形造られたる亞刺比亞は、其精華たるマホメットを自然の如くに育成し畢はむぬ、嗚呼大なる哉。天神宇宙は唯だ一神あるのみ、而して余は其預言者也。とは雄大なるアラビヤの精華を一身に鍾めて出現したる折伏主義の一大英雄兒マホメットが其母エミナの體內より出て來たると共に、双手に高天を指して唱へりき、初聲に非らずや、彼

は何等の組織的教育を受けず、左りながら彼は直に自然の懷に温く育成されて、自然の如くに成長しぬ、彼は永遠に琢磨を経ざるサンデイ砂漠上の美玉たる也。其風資及び思想は直接に自然の感染を受け、其血統は昔の預言者アブラハムの末葉に居り、而てゼムズエムの靈泉とカアバの神堂とは絶えず彼に天啓的の或るものを與えて已まざりき。マホメットが天降の以前よりして、亞刺比亞種族は悉く偶像崇拜の惡酒に酔ひ疲れたり、メツカのカアバ堂が其昔アダムが第七天を逐はし日に於て初めて降りて神室を作りし靈跡也として、人心に波動を與えし迄は、何も訝しむ可きことには非らざれど、崇拜の結果は迷信に陥り、カアバ堂中三百六十體の神像を安置し、外に花燈を懸け、之を日月星辰に擬するに到ては、既に非也、更に之を拜して以て宇宙の大能此に在りと爲すに到ては、非中の非なるもの也、靈泉神堂の爲め、メツカ市は國中

唯一の都府たるを得しと共に、また偶像崇拜の根源地たらざるを得ざりき。一世紀過ぎ二世紀過ぎて、偶像崇拜の迷信は國內の人心を動亂し、人は黒き一個の木像を大能全智也と爲すある而已、竟に宇宙の偉大アラの勢力を認識するに由莫からむとせり。マホメットは實に此等人民の迷信を覺醒し、原始時代のクリスト教の本義を示し、教えむ爲め、刺比亞精華を一身に鍾めて、偶像崇拜の中心點たるメツカのコレイシユ族の一門に産れしなりけり。其天降して、Great is Allah! Great is Allah!
 I bear witness that there is no God but Allah! 大なるかなアラ、大なるかな天神、余はアラの外に神無しと信す。——の初聲を揚ぐるや、ペルシア王の王宮俄かに震動して、十四樓臺は悉く倒れ、一千年來不滅の靈火忽ちに滅し盡し、而して世界の偶像は皆な斃れたりと傳へらるゝに非らずや、而して彼マホメットの身邊には、光輝一輪の影を爲し、彩色室

に充ちて、遍く人心を照したりと云ふ。傳説や誇張也と云へども、亦た以て偶像非認主義が殆むどマホメットに取て先天的の豫約なりし事を確信す可き左券也。彼は天降後殆むど四十年間を凡夫の群に送りて、而して徐ろにヘエラ山中默考靜座の行に入りぬ。
 父母を早くより失ふことは、偉人たり、傑士たり、英雄たるに於ての準備の一要件なるが如し。教界に就て視るに、クリスト然り、日蓮然り、マホメット亦然り、獨り此等に關してのみ然るに非らず、政治界文學界の天才多く亦た然るを見る也。之を以て古より孤獨のものは多く天才也との諺だに在り、想ふに浮草の水の間に々々流れ行く其苦き經驗こそ、人生の何たるかを直覺し盡して、直に天體の真相を捉へ得るものなる可し。
 マホメットは生れて僅かに二月にして其父アブラを喪ひ、六歳にして其母エミナを失ひたり。アブラ及びエミナは共に國中に於て有名

なる美貌の評ありしと傳はれり。
 此くの如く六歳にして其父母を喪ひしマホメットは牧人の妻ハレマ
 の手よりエレイシユ家の家長たるモターレブの手に育はれざるを
 得ざりき。モターレブ彼が頭を愛撫して曰く、亡きアブタラと何ぞ其美
 貌の能く似たるや、人々よ汝等は能く此好兒を護らざる可からず、我は
 我が一族中に彼より貴重するもの無ければ也——と。
 年十四にして始て商隊の群に入りシリヤに赴けり。此シリヤ行旅の一
 事こそマホメットが歴史中に在て遺却す可からざるもの一たり。彼
 が始めて異國の風物に接するを得しは實に此行旅の賜にして、而して
 彼が始めてクリスト教の教に浴するを得しも、亦た實に此行旅の賜な
 りき。左れど、彼は所謂荒野の子の未だ琢磨を経ざるものなるを以て毫
 も外國語を解せず、偶々チストリアン派の僧セルヤスと宿を同らせ

しことあるも、教育なき彼に在ては遂に如何とも爲す能はざりしが如
 かり。さはれ自然の懷より自然の大才を抱いて出て來たる此龍兒が爲
 め、シリヤの風物は、大なる教師たりしの一事は、掩ふ可からざるものな
 らむ。マホメットは、尠くとも此行旅に由て其幼き胸底に大なる思想の
 一滴を湧出したる也。十八歳にして軍旅に従ひ、再び商隊に加はつて多
 くの凡俗と群を同らし、日月は流るゝ儘に、風物は移る儘に、人生の半て
 ふ二十五年の春秋を到て、單調に送りたり。
 其最初の妻カデヂヤアを迎えしは、マホメットが二十八才の時のこと
 也。一説には初めカデヂヤアの執事となり、後カデヂヤアは彼の沈毅高
 邁にして格調雄渾なるものあるに戀々し、竟に結婚を申込めるものな
 りと傳ふ。カデヂヤアは富豪の寡婦にして、其時既に齡四十を越えたり
 きとぞ。而して此カデヂヤアこそ、マホメットが最愛の妻にして、又其慰

籍の友たり、イスラムの爲めには、最初の信者なりき。一夫多婦の習慣を有するアラビヤ國人なるに似ず、カデチャアの生前に在て、彼マホメツトが他に婦を求めざりし、の愛情は、能く兩者の間の和樂を見得可きものなる可し。

此くて彼は尙シリヤに行旅するを怠らざりき、風物は此間に老い、日月は此間に流れ行けり。アラブソールたる彼は、年既に四十を超えなむとす、其天才は徐々として發揮されざる可からず、彼の周圍に在て、偶像崇拜の聲は朝夕耳を聳し、而して一代の人心は恰かも悪酒に酔ひ疲れて永遠に醒めざらむとせるに非らずや。

ヘエラ山中の静坐の行は來れり、ヘエラ山はメツカを距る餘り遠からざる一小山也、毎年ラマダン(Ramadhan)の月を以てマホメツトは其妻カデチャアと共に此山林寂寞の幽地に静思するを常慣とせり、カデ

ンの月とはマホメツト暦の第九月也、彼は此静思黙考に依て直に宇宙の偉大を覺取し、偶像の到底一個の木片に過ぎざるを悟り、而して人生は總て神に従服する外、他に何等の義務をも有せざるを直覺なしぬ、イスラムの初編は、多く此静坐の傍ら起草されしもの也。

山林幽邃の地に於ける静坐黙考が如何ばかり大なる思想を附與するかは、吾人既に之を説きたり、今更らに絮説の要は莫かる可し、況むや一種天啓的のゼニヤスを有せるマホメツトに於てをや、また況むや晝は炎熱蒸すが如きの砂漠、夜は萬物露光に霑ひて活て聲あらむとするが如き平砂の一岡丘、雄大の高天が絶えず、神智靈覺の湧出する如きゼムズム泉の潰聲を響かすサンデイ砂漠の綠蔭に於てをや、マホメツトは其静思に由て、忽然インスパイアトせざるを得ざる也、果然、天使ガブリエルは、天神の聖旨を撃て、一夜マホメツトを訪ひぬ、天使は徐ろに

静思の境に入れらるマホメットの耳邊に囁きを爲して曰く讀めよ
 〇マホメット靜かに眼を睜れば四憐寂として聲無く無數の星燦爛た
 るほとりに白衣の貴人羽衣を擴げて笑を含めりマホメット曰く我は
 讀むこと能はず〇とガブリエル曰く神の御君に由りて讀め人を造
 りし天神の御名に由りて讀め親ら筆を執りて知らざる所を人に致さ
 る大能の神の御名に由りて讀め〇とガブリエルは尙語を繼けて嗚
 呼マホメットよ汝はアラの使ひ我は其旨を報せむ爲に來りし天使
 也〇〇云ひ了て白衣の貴人は消え失せぬマホメット愕然として驚
 異し豁然として感應インスパイヤートし天使の影を拜して曰くI
 ear witness that there is no God but Allah. 我はアラの外に神無きを信
 す〇〇而して彼は次に我は天の預言者也〇〇と喚叫したりき之を
 其の妻カデチャアに告ぐればカデチャアの曰くそは神の告げ給へる

也〇〇と又或日マホメットの靜思しけるとときガブリエルは再び現は
 れ來り絹布に記せし巻物を彼に示して去るアリルユイランは即ち此
 巻中より得來りし文字也と傳へらる
 兎にも角にもアリルユイランは此かる神秘的の默契の下に起草され
 しもの也マホメットは此一巻を抱いて靜かにヘラ山中より出で來
 りぬ彼は此ユイランの上にイスラムの教義を樹立し神の宗教に服従
 せざるものは其所に之を殺す可しとの信條を發揮したりき彼がレベ
 ーションや堅固にして何等の物を以てしても犯す可からざる程にアラ
 ビヤ特有の信念を持したりき彼が折伏主義は實に此所信の上に翻
 へされたる旗色なりし也
 預言者郷土に容れられずとは何の時代にも通用さるゝ眞理也我日蓮
 の如き十三年間研究の結果を以て購ひ得たる法華折伏の大法を説か

むが爲には、彼は先づ此自己を育成したる清澄寺の法壇より彈劾さるゝの餘儀なかりしに非らずや、而して日蓮は鎌倉辻の法壇に迫害され東條龍の口の難、伊豆佐渡の御堪氣頸の坐頭の疵、衣は裂かれ、身は傷き、弟子擅那等はその所領を失ふの不遇に陥れり。今マホメット、我は是れアラハの使者也と號してコレイシユ族に對するも、頑迷固陋の輩、安ぞ夫れ拜禮せむや。恰かも千光山清澄寺に於ける日蓮が念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊の他宗折伏の聲が狂人の妄語也として誹謗されし如く、マホメットも亦たコレイシユ族の嘲笑を買ふ外、何の得る所も是れ無かりしが如し。得る所無りしのみならず、彼は寧ろ之に由て、一代のコレイシユ家の反抗を需めたる也。更に之を日蓮に就て見るに、日蓮が權大乘の迷夢を覺醒せむ爲めに草せし立正安國論に依て、却て各宗の怨恨を買ひ、而して幾多の反抗咒咀に逢遇せし夫れに酷似せり。日蓮

が其三類の怨敵打定て候釋迦在在に於て既に爾り何況其滅後に於てをやと絶叫せし威權の如く、マホメットも亦たコレイシユ族の反抗の爲めに毫も其意氣を損する様のごとは是れ無かりき。汝に反對し神の宗教に服従せざるものあらば汝其所に之を殺せ、殺戮は悲しきことなれど、左れど誘惑は神の目に向て尙甚太しき罪惡なれば也とは、マホメットが恒に其信徒を激厲せしの言也、而して日蓮が徐に筆を執て各宗彈劾の咒文を草しつゝある間に、マホメットは前後二十三年間馬兵の間にコレイシユ族と相見えたる也。其唯一の寶典たるアルルコラ、ラ、ハは爲めに血と垢とに潤色し、畢はられぬ。

日蓮が研學十三年間の産物たる法華折伏の大法を、先づ其因縁深き千光山清澄寺に於てするの順序を把りしが如く、マホメットも亦ヘエラ山中靜思の賜たるイスラムを説くに當り先づ其血統を同うせるコレ

一イシユ族の席を撰むの餘儀なかりしは、吾人の曩に言説せる所の如し。果せるかな、コレ一イシユ族の悉くは、唯だ夫れ狂人の妄語を以て之を目し、中にはマホメットの袖を引いて之を中止せしめむとするもありき。マホメットが沸然として、縦令天神地祇の現はれて我言を止むるも、我の信條はアラ一の許せる所也。我はイスラムを説かずむば已まざる可し」と叱咤せしは、此時也。萬坐は更に笑聲冷罵を以て充されぬ。十四才のアリ、獨り起てイスラムの信者となりしも、此時也。マホメットは彼等の爲めに殺害せられむとせり。彼が如何なる迫害にも屈せずして、イスラムを説ける間に、コレ一イシユ族は彼に迫て、其首を得ずむば退歩せずと叫べり。マホメット難を遁れて、サファル山に隠れたり。彼が弟子アベルカ亦た彼に従へり。兎徒の尙追らむとするものあるの故を以て、マホメットを扶けてメジナに向ひ出發したり。彼等

の一行がメジナに達せしは、耶蘇紀元六百二十二年六月二十八日也。此脱走を稱して、世にヘジラ(Hijira)と云へり。ヘジラとはマホメットの曆の紀元を云ふものにして、此六百二十二年六月二十八日こそ、實に回教徒に取りてば遺却す可らざる紀念日なりけり。之より前最愛の妻カデチャアは六十五才の老を迎えて死しぬ。マホメット其歳九才なる女ファチアを弟子アリに嫁し、而して自からはアエシヤと云へる美女を迎えたり。アエシヤ姫をマホメットに送りて曰く、妾はガデチャアに勝らずや。彼女は寡婦にして、而して年老いたり。美はしかりき。色は褪せて、澤も衰へたり。妾は年若し、卿の妾を愛すること必ずやガデチャアに勝らむ。——と、マホメット否むて曰く、爾らす。天下何人も我教を信ぜざる時、彼女獨り之を確信せり。世界に於て我に唯だ一人の友あり。彼女即ち是れ也。——と。

難を遁れしサファル山中にはトールの洞穴あり、昔トールの神スリミ
 ルと戦て隠れし洞穴にもやあるらむ、マホメット此洞穴中に身を投じ
 てコレイシユ族の來襲を防ぎたる也。アベルカに扶けられて着せ
 しメチナは素ヤトレブと云ひたり、ヤトレブにはマホメット教徒あり、
 彼を迎えて旺に待遇せり。メチナとは預言者の市と云ふの意義にして
 一代の天使マホメットが入るに及むで、衆之をメチナと改稱せしもの
 なる可し。彼が此メチナに入りしは、年五十三の時なりき、此に一寺院を
 築き、布説大に勉め、多數の信者を得たり。進むでコバの都に入る、道路布
 説を試み、一邑一都靡然としてイスラムの教下に洗禮するに到りたり。
 此れ實に金曜日也、之を以てイスラム教徒に在ては此日を安息日とし、
 一周一回會教に集ふの日とは定めたり。
 之よりしてヘジュラの第十一年マホメットが年六十三に至る迄の間

は殆むど戦争を以て戦争に次がれたるの觀あり、然れども、布教三年に
 して弟子僅かに三人の當年に對比すれば、メチナに難を遁れし以後の
 マホメットが勢力は實に恐ろしかりき。メチナ及びコバの都人は一朝
 にして悉く彼の弟子となり、彼は進むて此等の人民の上に座するの帝
 王となりき。コバ及びメチナに於ける彼が道路説教は實に有名なるも
 のにして、彼は恒に道路の片畔りなる椰子樹下に起て法を説き教を垂
 れ、其主張は剛健にして其言辭は奇警に宛として是れ我日蓮が鎌倉辻
 の説法に異なる所無し。メチナ及びコバの都人等は争ひて彼が教を聽
 聞し、其或るものは羅馬のカイザルに謁せしも、威權竟にマホメットに
 及ばずと迄稱揚するに到れり。寔にや大なる威權の存せしならむ、彼が
 左手には恒にアルコラン經の撃げられつゝあるも、其右手には絶
 えず殺人劍の把まれつゝあれば也。

さ[◎]は[◎]れ[◎]劍[◎]に[◎]由[◎]て[◎]教[◎]を[◎]廣[◎]め[◎]よ[◎]と[◎]の[◎]天[◎]使[◎]ガ[◎]ア[◎]リ[◎]エ[◎]ル[◎]が[◎]言[◎]は[◎]眞[◎]なる[◎]哉[◎]。孤獨
にして友なきマホメットは一朝にして十數萬の兵を動かすことの到
て無雜作なる迄に大なる勢力を之の格言に由て得るの自由の身とは
なりたり。其甫めてイスラムの宗教戦争を記せしは、エルヘジュラ二年
兵九百五十を以てシリアよりメッカに歸らむとするコレイユの首
長を襲ひしこと也。之を宗教戦争の始めとして、年毎に各地人と戦ひ、或
は猶多軍と、或は羅馬軍と、十年一日未だ曾て劍を放たず、アール、コーラ
ン經は爲めに血色に潤色されざるを得ざりき。
彼が戦ふや、吾人の既に幾度か説示せしが如く、神の宗教の爲めに戦へ
る也。亞刺比亞國民に向ては、偶像崇拜の悪夢を打撃せむが爲めに、他の
教徒に向ては異教撲滅の大目的の爲めに、茲に於て彼は戦の庭にある
兵士を勵ますには恒に神の宗教の爲めに戦へ、然らずむば死して地獄

の火に焦されむと喚ひたりき。此かる至誠なる戦はイスラムの宗教戦
争史を除いては他に多くを見る事能はざる所ならむ。吾人が先に縷々
言説したる所の折伏主義は實に此イスラムの上に樹てられたるもの
也。ゲーテが言へりしが如く、若しイスラムにして此かる眞摯なるもの
とせば、世界の人は總てイスラムに耳を籍さる可からざるものあら
む。神の教に服従せよとの言を除いて、イスラムは他に何等の意義をも
有せざるに非らずや。
メヂメ以後のマホメットが歴史は悉く宗教戦争を以て充さる、吾人煩
を避けて、一々此が摘録の勞を把るを欲せず。唯夫れ思ふ可きはメヂナ
以後十一年間に亘りて、彼マホメットが戦の庭に於てなせし布教也。此
布教に要るし言辭は『マホメットの戦争主義』なる編中に記せり、參
照す可し。

此くてエルヘジュラの十年は来りぬ。此年はメツカに於てマホメットが爲め大儀典の行はるゝ年也。國內聞き傳へて、メツカに集まるもの十二萬人と號す。マホメットは駱駝に乗り、數萬の教徒を率ゐて、カアバ堂に到りぬ。群衆は『天使來!! 天使來!!』を喚びて、山河爲めに搖がむとせり。曾ては父母の國を罵り、人の世を呪ふ者として聖堂を逐はれしマホメット、二十年の歴史は一夢に歸して、今や彼は母國の爲めに『天使來!!!』を誂はるゝに到れり。而して人民は彼を仰ぎ見て、宛がら渴者の水を得たるが如くに歡喜しぬ。式に蒞みマホメットは、其昔アブラハムの足印ありと云ふなる天降の黒石に向て接吻を爲し、後メナの踏に下りて徹宵祈禱を行へり。

翌エルヘジュラ十一年、マホメット再びシリアを征す可く、行程に上る

第七天

の夜、病を獲て進む能はず。病床に居ること十四日、益々危からむとす。アエシヤア枕頭に待して看護に怠りなかりしが、自ら其起つ可からざるを信じ、筆を執て弟子の爲め法を説かむとして能はず。アエシヤア之を見て『既にアール、コーラン經の在るに非らずや、以て教を後世に残すに足れり、亦何ぞ他を要せむ』と諫むるに及び、彼靜かに頷き、暫く疲勞の眼を閉ぢて後、忽然として高天を目し、

“Lord grant me pardon, and joint me to the companionship on high.”

嗟呼上帝よ、我罪を許せ、然り天上樂園に入るを得せしめよ。

此一語を殘して、天國より迎へ、の神馬に騎り、靜かに第七天の邊りに赴きぬ。

征途にあるの兵、忽ち喚ひたり、アラの使者を葬る勿れ——と此聲は恰かも頭是なき童兒等が慈愛深き父を惜むが如く、亞刺比亞人の誰れ

もの口より發せられざるは之れ無かりき。左れど昔より孰れの預言者も皆な逝けり、アダムよりアブラハム、皆なまた永遠に逝いて又逝けり。マホメット豈長逝せざらむや。是れ實に耶蘇紀元六百三十二年六月八日也。

第十一編 マホメットと其奇蹟

偉人には總て奇蹟ある可く傳へらる。英雄の世に出現せむとするや必らず奇蹟ありとは古來より遺せる所也。而して其奇蹟の多くは偉人を裝飾す可く捏造されしものに非らざるは莫けむ。支那及び日本の歴史中には偉人屢々多くの奇蹟を附帶せる如し。

教界の偉人に就て見るに、其奇蹟の最も多きはクリスト也。クリストの傳記は殆むど奇蹟を以て充さるゝやの感あり。若し夫れ彼の記録中より奇蹟の一切を排擠せむ歟。クリスト傳は餘りに乾燥無味のものとなりしむ。クリストが足蹟の印する限り、其處に奇蹟の存せざるは莫し。『警は視、跛足は歩み、癩病は潔まり、聾者は聴き、死するものは蘇生し、貧しきものは福音を聞かせらる。』

九十五條
推定
打破ス
極メテ強

横腹ヨリ出産セト云ナリ

とは、クリストに對する一種の奇蹟を説明するものに非らずや。一度十字架に血を染めたるものが再び現世に甦へる如き事實が實在にある可きものに非らず。若くは病めるものが彼の手に觸れて全癒する等の事實が現世に於て在り得可きものに非らず。其他クリストが奇蹟を一々に列舉せむには、日も亦足らざる可し。日蓮に就て見るに、多少奇蹟の附帶せざるに非らざるも、其奇蹟は直に以て日蓮が歴史を裝飾すると云ふ迄には到り居らざるが如し。龍の口に於ける奇蹟以下、其奇蹟は餘りに日蓮記と關連せざるに非らずや。奇蹟の少なきは釋迦也。彼は奇蹟の多かる可くして、毫も之れ莫し。唯だ其出産の際、母の脇下より産れたりとの説あれど、そは多く咎むるの價わらじ。何となれば印度當時の俗言によれば、高貴の人は左脇下より出産すとし、中流の人は臍の邊より出産すとし、而して下層のものは股間

より出産すと稱し來れり。左れば萬代の精華なる釋迦の出産を脇下よりと爲したるは、想ふに釋迦を貴むより來りし畏敬的の語に過ぎざらむ歎。

今夫れマホメットに就て見る彼には、殆んど奇蹟らしき奇蹟莫し。マホメット鳩を馴して耳より豆を喙ばしめ、以て天使我に命を傳ふと爲せしとの説あれど、とは奇蹟を以て目するに足らず。

吾人の視る所によれば、マホメットは寧ろ根本より世の所謂奇蹟なるものを否認したりしが如く、爾り我は抑も何者ぞや人の宇宙と呼ぶところ、我の常に住むところの此玄妙の物は、何者ぞや——と宇宙に對て大なる疑念を懷抱せしマホメットは、些々たる奇蹟を斥けて云へり。

『仰いて世界を見よ。是れ實に驚異に非らずや。是れアラトの經營に非らずや。汝若し眼を開かば、其は全く汝が爲めに一の奇蹟たるを悟る。』

可し。神は汝の爲めに此土を作り、裡に歩む可き道を示せり。……天
 外高く雄飛して無限の蒼鷺を掠める大雲は、是れ抑も何處より來れ
 る！遙かに天の一方を眺むれば、偉人の黒魔彼處に懸て沛然として
 大雨を下し、此死せる土壤を蘇せしむ而して之が爲めに新緑繁茂し
 丁々として聳うる椰子、其實を結ぶこと累々たり、是れ豈に大なる奇
 蹟にあらざるや……更らに船を見ずや、船は是れ巨大なる動搖せる
 山、其翼を張て水上に翔けるは、是れ天風の追ひ遣る也、忽ちにして動
 作一息死せるが如き狀あるは、是れ神の天風を退けし也、船は死して
 復た動かず、是れ豈に大なる驚異にあらざるや、是れ汝が左券也……
 奇蹟とはそも何ぞや、爾何等の奇蹟を要する、爾の存在已に奇蹟に非
 らずして何ぞ神は即ち汝を造れり、一撮土より爾を造れり、汝一度は
 小なりき數年の前、汝全く皆無なりき、汝今好顔を有し、膂力を有し、思

想を有す、汝等は互に惻隱の情を有す、老齡汝を襲は、白髮悴顔重ね
 て到り、力衰へ體緩み、神氣全く銷沈して復再び無に歸せむ、於戲、是れ
 奇蹟に非らざるや。
 荒野の子たるマホメットは、天地の偉大に驚異し、宇宙を目して、奇蹟と
 なしたり、偉人の悪魔何處より來り、何處にか去る——と云ひ、船は神の
 呼吸に由て進み、且つ止まる——と云ひ、汝は一撮土より造られたるも
 のならずや——と云ふ、洵に是れ天神の呼吸の下に支配されつる宇宙
 は、直に以て大なる奇蹟に非らざるや、此大なる宇宙に對して、驚異の感に
 擊れ、而してヘエラ山中とゼムズエムの神泉に由て、直に感激を天授し、
 直に宇宙の大思想に觸接したるもの、是れ惡時代反抗の熱狂兒マホメ
 ット也、此くの如き荒野の子に在て、些々たる人爲的の奇蹟何爲るもの
 ぞ、如何程美なる奇蹟を造ると云へども、遂にマホメットを裝飾するに

足らざる也。

此くの如く、マホメット夫れ自身に奇蹟を需めざりし事は、此一語に徴するも炳かなる事實なるが、後世種々なる好奇家の現はるゝに及びて、幾多の奇蹟のマホメットに就て傳へらるゝに到りしが如し。想ふに是れ亞刺比亞人が母國の一大精華を他に誇る可く、殊更らに構へし所の裝飾に過ぎざる可し。二三を左に摘録しなむ。

(一)マホメット天降の時に於て、ペルシア王宮震動して十四樓臺俄かに倒れ、同時に世界の偶像皆な仆れたりと云ふの説は、當に然ある可く後世の追想せしものならむ。

(二)生れて直に上天を指し『嗚呼大なるかな天神』を唱出せしと云ふは、恰かも釋迦か生れて七日、天上天下唯我獨尊を唱へしと云ふにも似たり。察するに、印度に於ける逸話を捉へ來て、何人か之をマホメットが上に

も籍めたるものなる可し。

(三)ガヂヂヤアが婚を求めむとするや、一日門外より歸來するマホメットの姿を見るに五光輪を形造て彼の身邊を暈れり、ガヂヂヤア此に於て直に求婚せしと傳ふ。五光の説恐らく非也。唯だ夫れ天與の大才を抱けるマホメットの風資正嚴にして雄渾沈毅の性自から發せしものゝるを看取して、竟に彼に愛を送りしものなる可し。

(四)マホメット第七天遊行の奇蹟は、後世彼が奇蹟として傳へらるゝ内にて最も趣味深きものなり。マホメット一夜メツカのカアバ堂に在りける時、天使ガブリエル來り、神劍を以てマホメットが胸を割き、天界の活水を汲みて其心靈を洗ふ。忽にして神馬アルボラックをガブリエル牽き來れり、天馬の鬣には眞珠寶玉飾られ、其眼は星の如く輝き、面は人に類して能く人語を解す。ガブリエル之にマホメットを乗せて走せし

ナイの山ベスレヘムに於て、祈禱をなすこと多時、祈禱畢れば天馬空を翔けること鷹の如し、天外聲あり、マホメットを喚ぶ、又行くこと暫時、天外聲あり、又マホメットを喚ぶ、マホメット黙して天馬の翔けるが儘に趣く、カブリエル曰く、卿若し最初の聲を聞いて駒を止めむか、郷が弟子等は猶多教徒となりしならむ、卿若し次ぎの聲を聞いて天馬の歩を止めむか、卿が弟子等はクリスト教徒となりしならむ、と、此くてエルサレムに到達すれば、一個の美少年あり、清水、乳汁、酒を酌いて來る。マホメット乳牛を取て乳み、而してガブリエルと共に天國の梯子を攀ちて第一天に昇りぬ、純銀の色、四圍に輝きて、各星皆な天使ありて之を守護せり。マホメット此第一天に於てアダム、イブに遭ひ、第二天に於てノアに逢ひ、第三天に昇りぬれば、司命の神が天冊の上に生兒の名を記し、死者の名を削りつゝ、いあるを見る、第四天に到りぬれば、人間の罪業を悲みて嘆

きに沈める泣き神あり、マホメットは此にヨセフに逢へり、第五天は黄金界也、第六天に天地の守護神を見、第七天の大光明世界に達しぬれば、人皆な軀長く、躰大にして、各々七萬の頭顱あり、七萬の頭顱には七萬の口、七萬の舌あり、七萬の舌臺に七萬の聲を發せり、マホメット此處にアブラハムと晤れり、マホメットは更らに進んでゼトウ樹下を過ぎり、光明海を渡り、遂に天神の玉座の下に達するを得たり、彼は天神より、一振り、の劍を授りぬ、而してアハル、コハランの第二章とを、宛として是れダンテが神曲篇に似たり、此くの如き逸話は誠に多くアラビヤ人に由て後世に傳はれり、然れども之れ果してマホメットの奇蹟とす可きものなるや否や、吾人惑ひなきを得ざる也、恐らく後世の附會ならむ歟。

第十二編 マホメツトを憶ふ

吾人は、如上の各編を通じて、略ぼマホメツトの性格及び其折伏主義を示したり、今に於て尙筆を呵するの要を覺えざる也。唯だ夫れ、靜かにアル、コランを閉ぢて、而して一千年前の英雄僧マホメツトを憶はしめよ。

マホメツトは總ての點に就て、我日蓮と太甚だ相似たり。法華折伏の大信條が當時の日本教界に於て、勢からず各宗の怨恨を買ひ、日蓮は之が爲めに東條龍の口の難、伊豆佐渡の御勘氣を蒙るの餘儀なかりしが如く、マホメツトは其イスラムの爲めにはサファル山中トールの洞穴に毒刃を遁るゝの餘儀なかりきに非らずや。日蓮が豊富なる學識を以て他宗彈劾の宣告文を草しつゝある間に、荒野の子たる意氣健剛のマホ

メツトはアル、コランを撃けて、或はコレハインシユ族と或は羅馬人と或は猶多人と或はシリヤ人と戦争の庭に血を染め行きぬ。マホメツト戟を提げてイスラムを布説すること前後二十三年間、日蓮亦た清澄寺の法壇に他宗を熱罵してより筆陣を張ること二十餘年、一は權大乘教を否認して實大乘に歸依せしめむとし、他は偶像宗拜の惡夢より母國人を覺醒して神の教に浴せしめむとす、共に是れ虚を去て實を得、迷を斥けて眞を得せしめむとするもの、日蓮とマホメツト何ぞ夫れ軌を一にするや。

且夫れ兩者の著しく酷似せる點は、折伏主義の下に眞宗教の布教を試みたるの一事也。劍を持て教を廣めよとは、ガブリエルが訓戒、日蓮もマホメツトは寔にや此の訓戒の活きたる行者なりき。

既に劍に由て教を廣めむとす、彼等には無限の威力なかる可からず、無

限の壓力なかる可からず。日蓮は、我を犯すもの無間地獄に墮ちむと云ひ、マホメットは、我に反するものあらば其所に之を殺さむと絶叫す。是れ彼等の威力也。彼等の壓力也。而して此等の威力と壓力とは、アール、コ、ラン、と遺文録の各ページ毎に溢れつゝあるに非らずや。此折伏主義の下に、彼等は遺憾なく天神の全姿を示し、従ふものは極樂に導き、反くものは地獄に陥れむと號しつゝ、美なる一大新版圖、一大新帝國を新設したりぬ。其苦心に於て、其信念に於て、其覺悟に於て、日蓮とマホメット是れ正に同一模型中より鑄出されたる同一英雄ならざる莫からむや。吾人を以て見るに、日蓮の遺文録は即ちマホメットのコーランにして、其法華經は直に是れマホメットのイスラム也とせざる可らず。唯だ夫れ強て異なる點を摘示すれば、日蓮が二十餘年間を通して他宗彈効の宣言文を草したりしに比し、マホメットは自から劍を握むで異教徒

に對峙したりきの一事而已。筆と劍同しく是れ殺人器にして而して活人器也。其戰爭主義の傳道者たるに於ては、均しく一也。

* * * * *

昔の人は如何か觀したらむ。末法濁世に於て平和の布教は何の詮だも之れ無し。人は徒らにトルの鐵槌とサーベントの銳斧とに戰慄す。吾人は寧ろ平和の名の餘りに美にして、而して到底實在せざるものなるに戰慄せむとす。吾人が平和の夢物語に耽りつゝある間に、吾人が領土は奪はれ、吾人が權利は剝奪され、而して吾人が衣と吾人がパンとは他人の爲めに掠去さるゝに非らずや。實在界の實在は洋の東西を論せず。永遠に武裝の神の支配下に囑し居るもの也。誰か亦た平和の夢物語に耽けるの閑日月を有するものぞや。轉じて世の折伏主義の聲を聞け！曾てローロ帝が死せるシルラの首を見て、『斯くの如く年若く而し

シテ破壊
ミテミシ
笑ハ獅子
タラシヤ

て白髪を蓄ふることは正しく不具者也』と冷罵せし言は、今尙世界の人心の根底に響ける所也。ロベスピエールは其敵黨を待つに恒に逆徒の二字を以てするを忘れざりき。而して外人を待つには動物と同一視せよとは是れアリストテールの言に非らずや。平和主義が何等勝利のクレヂットをも示めし得ざるに對比し、翻て一代の勝利は恒に折伏主義者の手に收められつゝあるに非らずや。羅馬の根本教義を否定して起ちしルイテルを視よ、佛教八宗の法門を熱罵して餘さざりし日蓮を視よ、更らにイスラムの行者たるマホメットを視よ、彼等が荒暴の教海に魔神の如くに嘯く時、世界の平和は畏縮して竟に聲なきに非らずや。而して彼等は眞に一代のライオンたる也。吾人は此點に於て特にマホメットと日蓮に多大の代價を拂ふを禁する能はず。今や一代の人心、惡酒に酔ひて、惡國惡王惡臣惡民のみ邦土に充ち、鬼來

り魔來り、天變地天繼出して、天下安するに地無し。此かる間に、舊信仰は仆れて、新教未だ興らず、人は徒らに平和の二字に眩惑され、信と念と力と覺悟と威權と漸く莫からむとす。嗟呼、誰かまた折伏主義の大旗色を樹て、一代を驚倒せしむるものぞ。抑も亦た日蓮去て日蓮無く、マホメット去てマホメット莫からむとする歟。吾人靜かにコーランを掩ふて靜思す。

Great is Allah! Great is Allah! I bear witness that there is no God but Allah.

I bear witness that Mahomet is the prophet of Allah! Great is Allah! there is

no God but Allah; prayer is better than sleep, prayer is better sleep!

吾人はビルラが地平線上より登り出づる太陽を拜して、マホメットを謳へる此語を幾度か想記せず、非らざる也。(明治三十六年三月九日稿)

スカンザナビヤの願の神を、總ての野人が奉ずる神は、マホメットに由て廣められ、茲に則ち天國を成りて現はれぬ (Car-tyle)

マホメットの戦争主義 (完)

明治三十六年六月二十八日印刷
明治三十六年七月一日發行

定 價 三 十 五 錢



不 許
複 製

編輯兼
發行人

池 元 半 之 助

東京市下谷區谷中町八番地

印刷人

渡 邊 爲 藏

東京市京橋區日吉町四番地

印刷所

民 友 社

東京市京橋區日吉町四番地

發行所

東京市上野公園
谷中町八番地

春 山 房

叻鹿庵主人新著

マホメツトの戦争主義

四六版二百五十

ページ

定價三十五錢

右全國一手賣捌所

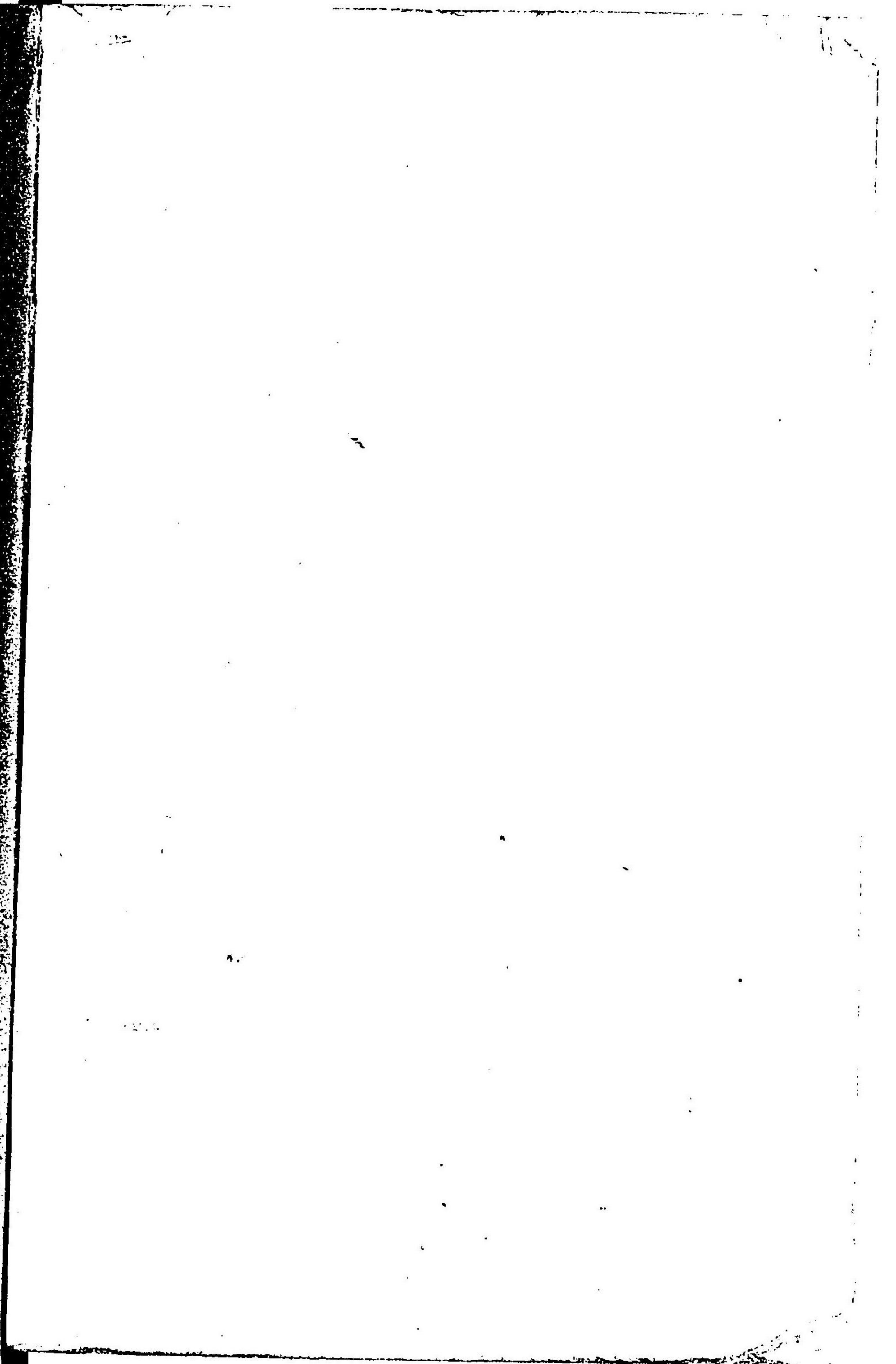
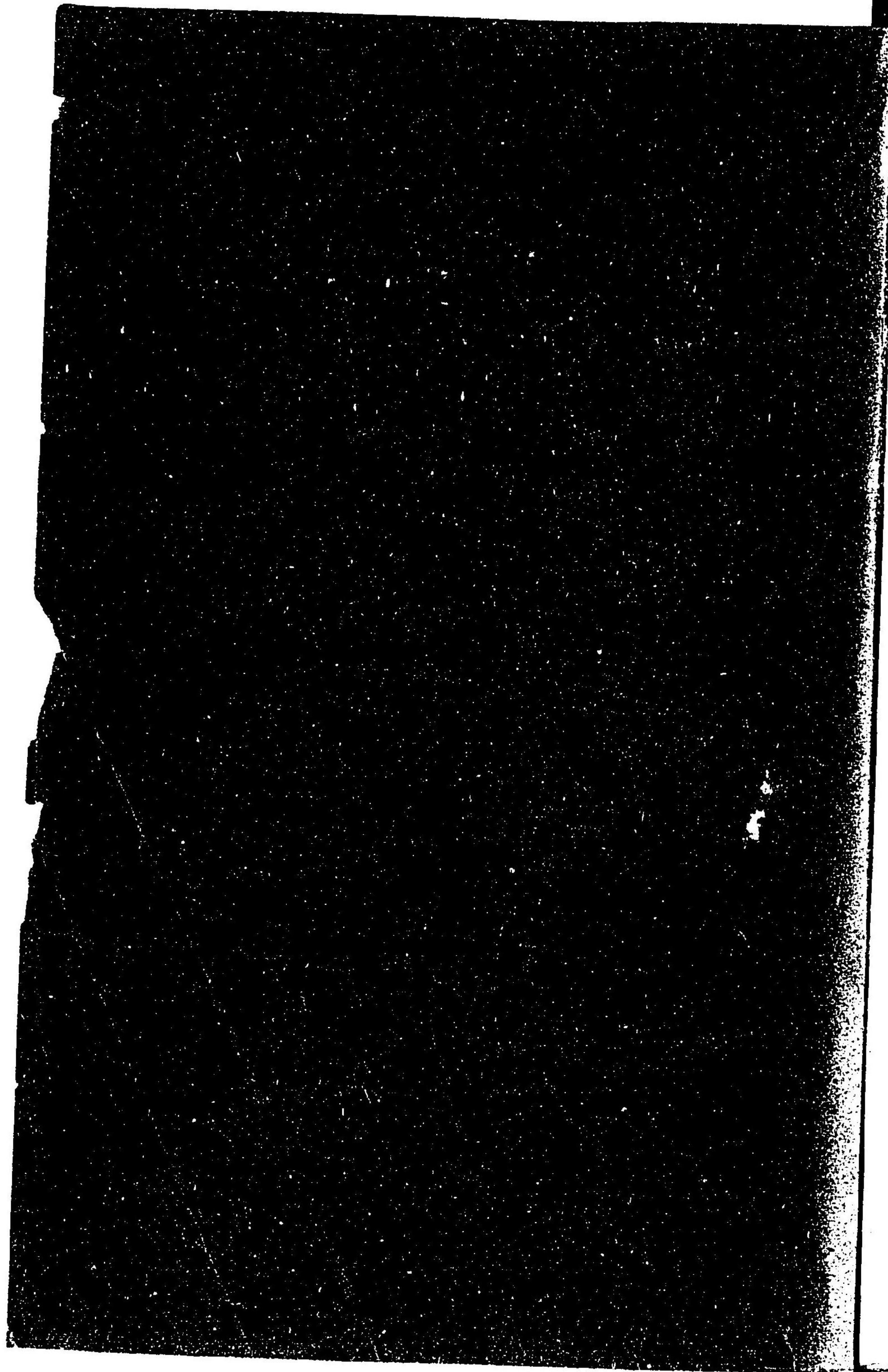
京橋區

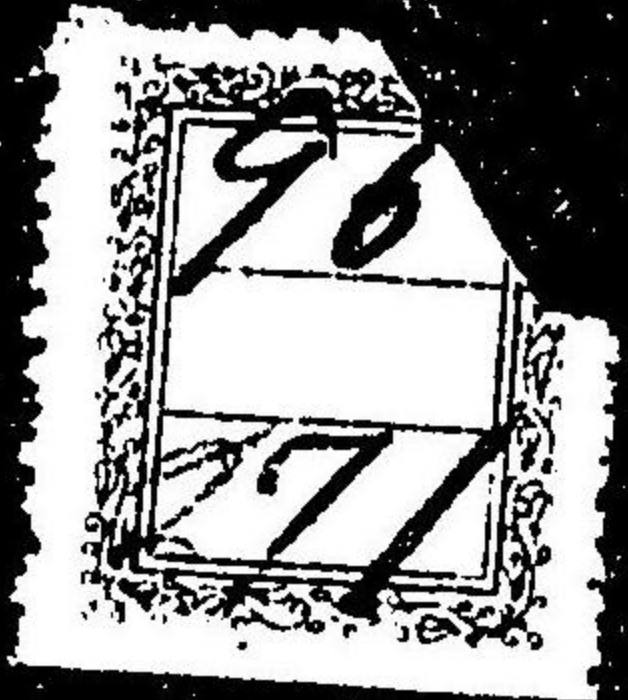
北

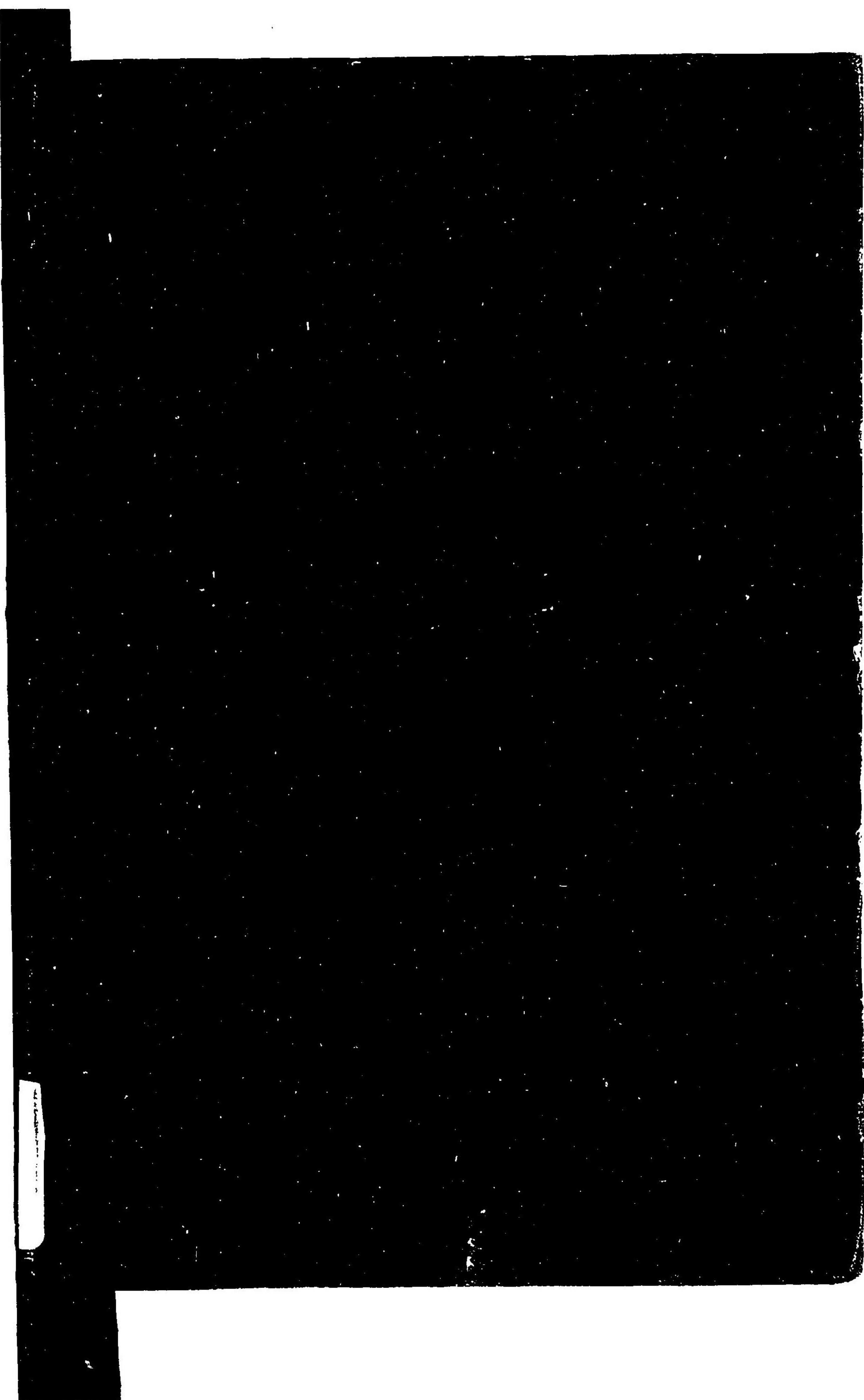
隆

館

96
271







1

96
271

013769-000-4

96-271

マホメットの戦争主義

池元 半之助 (叻鹿庵主人) / 著

M36

ABA-0259



